

## 第二百六十二話 お株を奪われて、惨敗へ

日本は応用の才には恵まれているが、創造力は欠如していると云われ、それは軍事においても同様と考えられていた。そのような日本が世界初の空母機動部隊を創設・運用して、赫々たる戦果を挙げた。国家戦略としては兎も角、開戦劈頭に敵主力艦隊に痛撃を与えた真珠湾攻撃に世界は瞠目した。が、その勢いはいつしか止まり、形勢が逆転した。

### 1 第一航空艦隊の創設

第一次世界大戦後に課せられたワシントン及びロンドン海軍軍縮条約により、日本の海軍力は対米劣勢を強いられることとなった。実用化の目途が立った航空魚雷を、艦隊決戦に使用する企図をもって、雷撃可能な航空機を艦艇に搭載し、「空飛ぶ水雷戦隊」とも云うべき部隊を創設した。当時、空母は主力艦として認識されておらず、赤城や加賀という大型空母を誕生せしめ得たのである。これにより日本海軍の邀撃漸減作戦をより重層的に行うことが可能となった。これを精力的に進めたのが、後の連合艦隊司令長官である山本五十六である。慧眼に感服する。

1940(S15)年、第一航空戦隊司令官の小澤治三郎は「航空艦隊編成に関する意見」を具申して、翌年4月10日、世界初の空母機動部隊(一航艦)が誕生した。

司令長官は南雲忠一海軍中將、参謀長は草鹿龍之介少将。新編時の編制等は、第一航空戦隊(空母〈赤城・加賀〉、第34駆逐隊)、第二航空戦隊(空母〈蒼龍・飛龍〉、第23駆逐隊)、第四航空戦隊(空母〈龍驤〉、第3駆逐隊)の3個戦隊であった。



### 2 空母機動部隊の活躍と凋落

#### (1) 真珠湾攻撃

赤城、加賀、蒼龍、飛龍、翔鶴、瑞鶴の6隻の空母を基幹とする機動部隊により、1941年12月8日未明真珠湾攻撃を敢行して、世界を驚かせた。

#### (2) その後の作戦

ウェーク島攻撃、ラバウル攻撃、ダーウィン攻撃、セイロン沖海戦(1942/4/5~9)までは、一航艦は大戦果を挙げながらも被害は微少で、艦艇には一隻の被害もなかった。史上類のない連続的勝利を記録し、第一航空艦隊は世界最強の機動部隊となった。

#### (3) ミッドウェー作戦(1942/6/5)とその後

MI作戦で敗れて以降、日本から空母運用術を学んだ米国の圧倒的戦力の前に、類勢を強いられることとなった。

#### (4) 史上初の空母機動部隊の決戦 珊瑚海海戦(1942/5/4~8)

日本海軍の損害は正規空母1隻大破、軽空母1隻沈没、駆逐艦1隻沈没、航空機約100機を喪失。米海軍に与えた損害は正規空母1隻沈没、正規空母1隻中破、給油艦1隻沈没、駆逐艦1隻沈没、航空機約100機を撃破であった。

戦術的には日本の勝利であったと判定されるが、日本海軍の機動部隊は航空機や優秀な搭乗員を多数消耗、ポートモレスビー占領と珊瑚海制圧を断念する等、

その後の戦局に甚大な影響を及ぼしたとされる程に多大な損害を被った。

### 3 時代を見る目・感性の涵養こそ

一航艦の勢いが止まったが、艦隊の連続長期運用も問題だった。

厳しい戦いを強いられることを予期しての海軍戦史上画期的な空母機動部隊創設であったが、その持つ意味を見抜けずに、米海軍にしてやられた。一部の先駆者のみでは時代の流れは変えられなかったのだろう。国力の問題もあるのかも。その点、米軍の柔軟性には脱帽だ。また、島嶼を不沈空母化し、基地航空部隊を配置するという発想も卓抜したものであったが、如何せん、その戦力化は間に合わなかったし、不完全であった。日々進化する戦いを的確に見極める確かな目を持ちたいものだ。

(了)